

# 漢文教材を用いた文章表現能力を育成する方法の研究

教科教育高度化分野(17220906) 芹 沢 龍 汰

本研究では漢文教材の唐詩の絶句の起承転結構成を利用して生徒に「書く力」を身につけさせるための方法を研究する。今、高等学校国語科において生徒が文章を書く機会がほとんどなく、論理的な文章を書く能力が低下している現状がある。この問題の解決のために筆者は漢文教材の唐詩の絶句の起承転結構成を利用することが効果的であると考えた。本稿では先行研究を踏まえた授業実践から得られた成果及び今後の課題について報告する。

[キーワード] 書くこと, 論理的な文章, 文章構成, 起承転結, 漢文

## 1 はじめに

本研究では高等学校国語科の授業において、漢文教材の唐詩の絶句の起承転結構成を利用して、生徒に論理的な文章を書く力を身につけるための方法を研究する。従来のような漢文の文芸性ではなく、実用性に着目した指導法の確立を目指すところに本研究の意義がある。漢文そのものを学ぶのではなく、生徒達の実生活に生かせる文章表現能力の向上のために漢文を利用する。

## 2 先行研究に見る本研究の必要性(下線は筆者によるもの)

### (1) 現状の国語科が抱える問題点

島田(2017)は、高校三年間の国語の授業で、400字程度以上の文章を書いた経験が一度も無い学生が40%以上存在すると指摘している。

中央教育審議会(2016)の答申において、以下のように指摘されている。

- ①「書くこと」の学習が十分に行われていない。
- ②古典の学習で、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱い。
- ③古典の学習意欲が低い。

大石(2007)は古典作品の教材化について、「優れた表現に接して自分の表現に役立てるなどの「書く能力」の育成の際にも、積極的に教材化に取り組まれるべきだと思います」と述べている。

### (2) 起承転結の論理性

齋藤(2007)は「起承転結は、論文やレポートといった論理性を重視する文章の分野でも、いや論理性を重視する分野でこそ力強い支持を受けている」

と述べている。

高松(2004)は「文章は起承転結だ」などと思い込むと、「転」の部分でガラリと転じようとして、文章全体のテーマとは一見何の関わりもないような話題を唐突に持ち出してしまおうと述べ、「転」の効果に対して批判的である。

### (3) 唐詩の絶句における「転」の効果

石川(1998)は起承転結構成を以下のように説明する。

- 第一句—起句 詠い起こし。
- 第二句—承句 起句を承け、場面を増幅する。
- 第三句—転句 場面を転換する。
- 第四句—結句 転句をうけつつ、全体を収束する(しめくくる)。

そして「春曉」を例にとり「転」の役割を以下のように説明する。

花 夜 処 春 春 ② 花 夜 処 春 春 ①	落 来 处 眠 曉 書 落 来 处 眠 曉	つ 風 啼 眼 き 知 来 聞 不 き 多 風 啼 覺 下 少 雨 鳥 え し 少 声 鳥 ず 文	事 聞 曉 文	原 文
--	---	---	------------------	--------

<起句>「春の眠りは心地よく、朝になったのも気づかずに寝ている。」と詠い起こす。

<承句>「あちらこちらで、鳥の鳴く声が聞こえてくる」と詠い、起句を承け、心地よい春の朝の気分を増幅させる。前半の二句で、「春の朝の心地よさ」が描き出される。

<転句>「ゆうべは吹き降りだったなあ」と詠う。

前半の明るい様子とは裏腹に、「夜」「風雨」の語が暗いムードをかきたてる。これが“転換の妙味”であり一篇の要である。

<結句>ゆうべの吹き降りによって、「今朝の庭は、花がどれほど散っているやら」と想像する。前半に描き出された「春の朝の心地よさ」は見事に収束する。

転句の効果について「転換といっても、藪から棒に場面が変わるわけではない。」と述べ、この詩の場合、前半で今朝の明るい春を描くことはゆうべの吹き降りを思い出させる下地になっていると説明している。

鈴木(2009)は、転句の転換方法は意外性に富んでいるほど作者の工夫やその詩の魅力が感じられるが、だからといって突拍子もないものを持ってきさえすればよいというわけではないと指摘している。

#### (4) 序論・本論・結論と起承転結の関係性

久保(1999)は書かれた文章の内容ではなく、役割や効果に着目し、学術論文における序論・本論・結論の三段階構成と起承転結の構成の類似性を以下のように指摘する。

「序論」＝「起」(問題のテーマの提示、本文の要約、結論の提示)

「本論」＝「承・転」(実験等を含む問題事実の提示と分析、テーマと本論の展開)

「結論」＝「結」(論文の目的である結論とまとめ)

渡辺(2017)も文章の型としての起承転結について、序論・本論・結論の本論の部分が「承」と「転」に当たるとし、「転」において視点や立場の転換(特に、想定される反論への言及と反駁)を強調する型であると述べている。

#### (5) 起承転結構成の利点

久保(1999)の指摘する起承転結構成の利点。

- 展開が具体的でわかりやすく活用しやすい。
- 四段の展開を身につけておくほうが、より長い文章を書きやすくなる。

### 3 研究の方法

以上のことから本研究では、生徒の論理的な文章を書く力を育成するために、漢文教材の唐詩の絶句を利用した指導法を確立する。先行研究の検討でも触れたが、今回唐詩の絶句を教材に用いる理由は以下の四点である。

(1) 唐詩の絶句は明確な起承転結構成である。

(2) 唐詩の絶句には大量の作品があり、学習者の能力に応じて適切な素材を教材化することが可能である。

(3) 文字数が少ない唐詩の絶句は、知識の定着に有効な反復学習に最適である。

(4) 本研究では全ての生徒の論理的な文章を書く力の育成を目指す。短い定型である唐詩の絶句は語法的なことを苦手とする学習者に対しても抵抗が少ない。そのため全ての学習者に対して有効な教材だと考えられる。

## 4 本実践

### (1) 単元計画

表1 指導計画

○単元名:「絶句」 国語総合 数研出版 ～起承転結の構成を理解しよう～
○単元の指導計画(3時間)
・学習の流れ
1. 漢詩の基礎的な内容理解。「静夜思」の音読。起承転結構成の理解。
2. 「静夜思」の内容理解。
3. 「絶句」のまとめ。
・指導上の留意点
1. 板書用のワークシートを配布する。漢詩の読み方を確認する。四コマ漫画を用いた起承転結の解説。作者の視線に注目させる。
2. 「作者がみていた月の形は何か」という発問を中心に内容を読解する。
3. 「勸酒」于武陵の詩の句を無作為に並べたものを配布し、起承転結構成を意識して正しい順番に並び替えさせる。

本実践は、県立 Y 高校において国語総合(漢文)の授業を一年生の二クラスで行った。

生徒の実態は、高校生になって初めての漢詩の授業であるためまずは基礎的な内容の確認をする必要がある状態である。授業態度は真面目な生徒が多く、教員の板書をしっかりノートに書き写すことはできるが、発言に関しては積極性に欠ける。

一時間目に漢詩の基礎的な規則を学習する。二時間目で「静夜思」の内容理解を行う。三時間目に練習課題として、教科書に載っていない唐詩の絶句を使い、句の並び替えを通じて起承転結の構成を理解させる。本実践ではこのような単元の指導計画で行った。具体的な指導計画は表1参照。

(2) 主教材

今回主教材として扱った「静夜思」の起承転結構造は以下のようになる。

① 原文 静夜思 牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷	② 書き下し文 静夜思 牀前月光を見る 疑うらくは是れ地上の霜かと 頭を挙げて山月を望み 頭を低れて故郷を思ふ
---	--

<起句>寝台の前の月の光を見て詠い起こす。  
 <承句>起句を承け、月の光の描写を行う。前半二句は視線が下方へと注がれている。  
 <転句>承句から転句にかけては月という共通項を用いて視線の転換が見られる。視線は下方から上方の月へと直接注がれる。  
 <結句>結句では、転句で見た月に喚起され作者は故郷を思い出す。自然と作者の視線が再び下方へと注がれ詩がしめくくられる。

この詩の主題は結句で示される望郷の念である。それは、月を見るという行為の背景には、遠く離れた故郷の人々も同じ月を見ていることから望郷の念が生まれるという発想があるからである。その主題を導くために転句で視線の転換がなされる。転句で月を直接見ることにより作者の目に映る月の輝きが増す。そして、作品の目に映る月の輝きの増加に比例するように望郷の念も強まる。結句において、作者は望郷の念に堪えかねてうなだれるのである。今回の転句には望郷の念という主題に説得力を持たせる効果がある。

(3) アンケート結果

授業終了後に二つのクラスに対して以下のようなアンケートを実施した。

表2 アンケートの内容

Q 今回の授業を受けて、絶句の起承転結の構成の理解度について、以下の1～5までの番号に○を一つつけてお答えください。 5. 大変よく理解できた 4. 理解できた 3. どちらとも言えない 2. あまり理解できなかった 1. 全く理解できなかった
---

集計結果は以下の二つの表のようになった。

表3 一組アンケート集計結果

Q		一組個数	割合
5	大変よく理解できた	22	75.9
4	理解できた	7	24.1
3	どちらとも言えない	0	0.0
2	あまり理解できなかった	0	0.0
1	全く理解できなかった	0	0.0
	合計	29	100.0

表4 二組アンケート集計結果

Q		二組個数	割合
5	大変よく理解できた	12	35.3
4	理解できた	21	61.8
3	どちらとも言えない	1	2.9
2	あまり理解できなかった	0	0.0
1	全く理解できなかった	0	0.0
	合計	34	100.0

5 考察

アンケート集計結果では、合計で98%の生徒から起承転結構成を理解したという回答を得ることができた。この結果の原因を授業実践及び生徒たちの記述を基に分析する。

(1) 「一首に対し、時間をかけ丁寧に扱ったこと。」

今回の実践では全三時間の指導計画の内、二時間を使い一首の唐詩の絶句を扱った。まず唐詩の絶句における起承転結構成を説明し、次に教科書教材の「静夜思」を使い具体的に理解させるという授業を行った。全体の構成である起承転結の理解のためにそれぞれの句の表現、句どうしの関係性という部分的な内容を、発問を通じて説明しながら理解を深めさせた。このことが結果的に丁寧な指導につながり、起承転結構成の理解を深めたのだと考える。

(2) 「四コマ漫画を利用したこと。」

今回起承転結構成を説明する上で四コマ漫画を利用した。四コマ漫画は起承転結構成が整っており生徒にとって理解しやすく、教具として適切であると筆者が判断したものを使用した。6名(全体の約9%)の生徒の感想に、「四コマ漫画を例にして説明したりすごくわかりやすかったです。」といった四コマ漫画を使った授業にたいする肯定的な意見が見られた。生徒にとって親しみやすい四コマ漫画というメディアで起承転結構成を視覚化させて実感させたところが今回効果的な手立てであったと考える。高校での漢詩の初学者の導入において、メディアを工夫して視覚化することが有効

であることを示す事例だと考える。

(3)「並び替えという活動が有効であった。」

三時間目に起承転結構成の理解のための練習課題として、教科書に載っていない唐詩の絶句を使い、正しい順序に並び替えるという活動を行った。この活動に対し生徒から「パズルみたいで面白い」や「印象に残った」という感想があった。これは起承転結構成を、並べ替えという活動を通じて試行錯誤しながら学習する事により生徒の学習意欲を高め理解が深まったと考える。このことからそのような活動を仕組みやすい唐詩の絶句の、教材としての価値が保証される事例だと考える。

(4)「教材、教具の工夫。」

今回全三時間の授業でワークシートを使用した。11名(全体の約17%)の生徒が「ノートにまとめるのではなく、プリントに書くというのが、まとめやすかったです。」といったワークシートを使用した学習に対する肯定的な感想を記述していた。今回は限られた時間を最大限に有効活用するために、授業中に板書をするのではなく、事前に用意したプリントを貼り時間を短縮した。こういった教材、教具の工夫も起承転結構成の理解のための一助となったと考える。

## 6 今後の展望

(1)「生徒たちの起承転結構成の理解度を客観的に測る手段の確立。」

今回のアンケートは理解度を測る明確な基準が無かったため生徒の授業への関心、意欲といった情意面を判断するにとどまった。今後は加えて理解度を客観的に捉える方法を模索する。

(2)「適切な漢文教材の検討。」

今回の実践では教科書の漢詩教材を利用して実践した。今後は高校生にとって起承転結構成がより理解しやすい唐詩の絶句を教材として活用したい。そのためにまずは教科書に採択されている唐詩の絶句のを中心に起承転結構成を検証していく。

(3)「論理的な文章を書く力を育成する具体的な方策の検討。」

本実践では唐詩の絶句を利用し起承転結構成を理解させるという型の定着までしか到達することはできなかった。次回の実習では実際に文章を書く授業実践を行いたい。そのために国語科における「書くこと」および漢文の授業の先行研究と実践例を検討していく。

(4)「実際に書かせる文章量についての検討。」

本研究では全ての生徒に論理的な文章を書く力を育成する事を目標にしている。そのため、現段階の到達目標として四百字から八百字程度の文章を書くことを想定している。久保(1999)は、四百字というのは普通の人が、日常的に必要な最低限な文章量でありまた、何かまとまった考えを伝える最小の字数であると述べている。また大学入試の小論文は八百字程度が多いと述べている。ここから高校生にとっては上記の文章量を書く力が必要であると判断した。今後はこの文章量の妥当性について更に精密に検討していく。

## 引用文献

- 中央教育審議会(2016)「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)(最終閲覧日 2017年12月5日)
- 石川忠久(1998)『漢詩を作る』, 大修館書店.
- 久保博正(1999)『「文章の達人」になる超マニュアル』, すばる舎.
- 大石健一(2007)「高等学校国語教育における日本の古典」, 『日本語学』, 2月号 第26巻第2号 通巻第317号, 48-54.
- 斎藤美奈子(2007)『文章読本さん江』, 筑摩書房.
- 島田康行(2017)「大学新入生は高校「国語」で何を学んでくるのか」, 渡辺哲司・島田康行, 『ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ』, ひつじ書房, pp. 19-33.
- 高松(2004)「起承転結」小考」, 『高崎経済大学論集』, 第46巻 第4号, 115-122.
- 渡辺哲司(2017)「なぜ大学で「パラグラフ」を教えなければならないか」, 渡辺哲司・島田康行, 『ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ』, ひつじ書房, pp. 163-179.

*A Study on Methods to Train the Development of Expression Ability by Using Sino - Japanese Material*  
Ryota SERIZAWA